

繰り返し、剖検の結果、癌性腹膜炎による癒着を認めた。

14. 尿崩症発症後に発見された肺小細胞癌の1例

庄田英明, 山本 司, 国友史雄
(千葉労災・内科)
安川朋久, 由佐俊和
(同・呼吸器外科)

症例は57歳男性。間質性肺炎にて経過観察中、尿崩症を発症した。当時、頭蓋内病変は認めなかったが、半年後、禁煙外来を受診し、胸部CTを施行したところ、肺野腫瘍影を認めた。精査の結果、肺小細胞癌で脳MRI上、多発脳転移を認めた。下垂体、視床下部には尿崩症をきたすような明らかな病変は認めなかったが、経過より肺小細胞癌との関連が強く示唆され、文献的に考察を加え報告する。

15. 内視鏡超音波が有用であった末梢腫瘍性病変の2症例

大森繁成, 菊池典雄
(千葉市立海浜・内科)
滝口裕一 (千大・肺内)

症例はいずれも検診発見例で、それぞれ右S4と右S2に約2cm大の腫瘍性陰影を指摘され来院。気管支鏡下肺生検施行時に内視鏡超音波(EUS)を施行し、腫瘍は辺縁がほぼ明瞭なiso echo lesionとして描出された。1例は肺腺癌の診断となり外科的切除術が施行され、1例は擦過細胞診、組織診いずれも陰性で約2週間の経過観察にて腫瘍性陰影は消失した。末梢腫瘍性病変の診断率向上にEUSは有用と思われた。

16. 皮膚筋炎による間質性肺炎の治療経過中早期にカリニ肺炎を合併した1例

水野里子, 中村祐之, 河野典博
(小田原市立・呼吸器科)
川野 裕 (同・外科)
長谷川章雄 (同・病理)
大山雅代 (東京厚生年金・内科)

症例は69歳男性。平成11年3月よりH-JⅢ度の労作時呼吸困難出現。平成11年9月、胸部レントゲンにて両下肺野のスリガラス影を指摘。入院精査にて、CPK、Aldの上昇を認め、抗Jo-1抗体陰性だが、PMに合併した間質性肺炎と診断。ステロイドセミパルス療法施行後、PSL 60mgより内服を開始した。2ヵ月後、PSL 30mg内服中に、カリニ肺炎による呼吸不全を発症した。後に、解剖を得ることが出来た。

17. 入院後早期に多臓器不全に陥り、急速な経過で死亡したAIDS初診例

家里 憲, 小南聡志, 吉田康秀
清水浩安 (沼津市立・内科)

症例は61歳男性。主訴は呼吸困難。現病歴は近医で胆嚢癌疑われ6月27日当院外科入院。入院時検査でHIV(+)。同日呼吸困難出現。胸部レ線スリガラス陰影を認めカリニ肺炎疑いにて翌日当科転科。入院時多臓器不全を呈しDICの進展悪化を認め、入院後直ちに治療を進めるも第三病日に死亡。今回入院後早期に多臓器不全に陥り、急速な経過で死亡したAIDS初診例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

18. ノカルジア肺炎にて発症したAIDSの1例

久我明司, 平野 聡, 猪狩英俊
(千大・肺内)

症例は42歳男性。平成12年7月、39℃の発熱が出現、肺炎の診断にて抗生剤投与され解熱するも、再度発熱。画像上、縦隔リンパ節腫脹を認め、又、HIV陽性が判明し悪性リンパ腫が疑われ、当科紹介。CT、BFSの所見にて膿瘍を形成したノカルジア肺炎と診断。BFS後の自然排膿、及びIPM/CSの大量投与で症状改善し、その後ST合剤内服したが骨髄抑制のためMINO内服に変更し、軽快し退院となった。

19. 気管支洗浄液のPCRにて水痘带状疱疹ウイルスDNAを検出した水痘肺炎の1例

松原 宙, 森 典子, 斉藤正佳
(国保成東・内科)

症例は33歳女性。2000年4月13日顔面より水疱が出現し全身に広がった。その後発熱を認め、4月15日近医を受診し、水痘症と診断された。全身状態不良のため、4月20日当科紹介入院となった。胸部X線写真にて両肺野にびまん性に粒状影を認め、胸部CTにて両肺野にびまん性小結節影及び浸潤影を認めた。4月26日、気管支鏡検査を施行したところ、気管支粘膜に白苔の付着を認めた。右B5より回収した気管支肺胞洗浄液のPCRにてVaricella Zoster Virusの遺伝子を検出した。アシクロビル、γグロブリン製剤、抗生剤の投与にて胸部レントゲン所見の改善をみた。水痘肺炎の確定診断において、PCR法を用いたDNA診断は有用であると考えた。